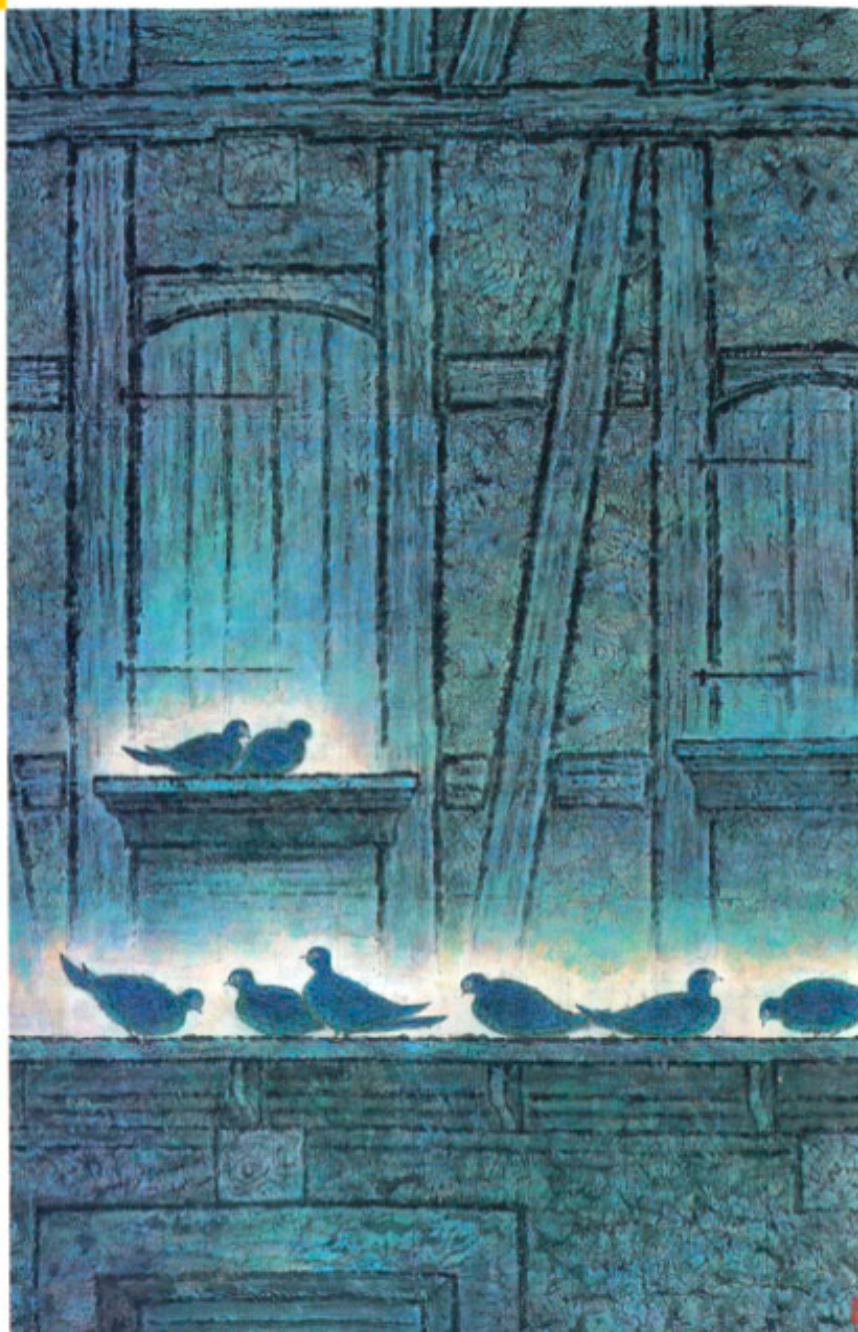


沖

7
2015

俳句雑誌[おき]



朴 翠 陰

能村 研三

二つの連載

発行所には毎月たくさんの結社誌が送られてくるが、その中で毎月欠かさず読む連載ページがある。

その一つが「対岸」主宰今瀬剛一さんが書かれている「能村登四郎ノート」である。この六月で回を重ねてへへ六二回、見開き二ページに渡つての白熱した登四郎論である。すでに平成十三年より百回連載されたものを平成二十三年に単行本として纏められているので、お読みになった方もおられるだろう。

この連載のきっかけは、登四郎が亡くなった年、悲しんではかりいなくて、何か自分がするべきことはないかと考え、今瀬さんがご存知の登四郎について、ご自身の備忘録のつもりで書き始められたという。

「対岸」の六月号では、昭和五十六年あたりの事が書かれている。この年の前年の十二月に福永耕二が亡くなり、この年の七月には師である水原秋櫻子が亡くなった時でもあり、深い悲しみの中にも今後独り立ちしていかなければならない覚悟を深めた年でもある。

先師てふ言葉はじめの夜涼かな

登四郎

きれぎれの根岸の路地に春惜しむ

春光や 玻璃八椀に子規宇宙

悼・遠藤真砂明さん

ますらをの卯波うねりを鎮めをり

茅花流し海の男の葬りかな

師と見ゆ朴翠陰の高みかな

トネルの陽差しは出口五月行く

北上勉強会

曲り家に代役の山羊南風吹く

青葉の夜鬼剣舞の胴震ひ

北上川の青を貫き六月へ

ホップ蔓絡み絡ませ梅雨兆す

この年の毎月の「沖」に連載した登四郎の執筆した文章と作品についてもつづきに批評をされている。

もう一つは水田光雄主宰の「田」に連載されている、仲米司氏による「福永耕二論・はるかなる墓碑」で、見開き四ページにわたるものでこの六月号で三十九回と回を重ねた。今回の仲氏の文章は昭和五十年の頃の耕二について論じておられるが、氏は耕二の俳句人生で最高潮の時であったと捉えられている。

踏青や手をつなぐ雲ひとり雲

耕二

さらに氏の文章にはこの年に亡くなった相馬遷子が耕二にあてた編集を気兼ねなくやるようにとの励ましの手紙が紹介されている。

「田」の水田主宰が、俳人論が欲しいという話があり、主宰から「福永耕二を書いてみないか」と勧められて連載が続いているという。仲氏は耕二の俳人としての生き方、考え方に惹かれていった。とにかく純粹でまっすぐなところに惹かれて連載が続けられている。

この二つの連載とも、「沖」が真っ先に取り組まなくてはならない企画であるが、私たちにとつても是非一読しなければならぬ文章である。

能村 研三

蒼茫集



懺悔 安居正浩

ささやかな罪のごとくに蝌蚪生まる
風にまづ鬣なじむ 厩出し
むくむくと自己主張ある新生姜
桑の実や青春の日に懺悔あり
船虫の逃げて砂浜置き去りに
母の日の花屋にあふれ子の笑顔

陰影 荒井千佐代

サーカスの口から火噴く桜の夜
異人墓地の石階は急花あざみ
聖玻璃を春陽抜けて来てレクイエム
磔像に深き陰影花の昼

復活祭観覧車より海を見て
逢ひに行くその時よりの春日傘

五月の窓 辻美奈子

星々のシンコペーション春の逝く
夜の新樹羽生結弦の目が射りぬ
開け放つ五月の窓もわが脳も
薔薇の芽のやんちや盛りの狭庭かな
父居ますやうに端午の庭の椅子
母の日や小鳥のやうなウエイトレス

もう何も 吉田政江

牡丹咲くこの世に時間まだ残し
白牡丹純粹てふを疑はず

期待とは含む牡丹の青蕾
近すぎて疎まれてをり白牡丹
竹皮を脱ぐもう何も欲しがらず
麦秋増・遠藤真砂明録や青年の眼で旅立てり

伊會保物語

千田百里

鳥帰る伊會保物語の国へ
地下室の上に半地下メーデー歌
著莪咲いて樹下一面のせり上る
山藤を差し出してゐる遠嶺かな
海増・遠藤真砂明録五月安房の走者を見失ふ
海を愛せし男攫ひぬ大南風

地下街

上谷昌憲

地下街に飲食夥しき立夏
鯨幕箱根空木を隠しけり
何となく亀の集まる藤の花
塗りたての貨車の漆黒夏来る

蟻蠓に弓引き絞るブロンズ像
夏燕屋根屋ひねもす屋根を這ひ

拳ゆるめの日

甲州千草

嘯つへは牡丹園で研究の本ありや花散里てふ独創樹

牡丹の拳ゆるめの日和なり
白牡丹無垢の芯まで日に染まる
筍や外レジ混みぬ道の駅
脱ぎし靴庭へと回す莖立菜
辣蕪剥く灯しいきいきして来たり

不壊の珠

秋葉雅治

朴咲くや喩へ称へて不壊の珠
夏蝶の乱舞と見せて翅たむ
夏の蝶当であるごとく無きごとく
泰山木花を仰ぎて旅立ちす
かき、さざえそして赤貝傘雨の忌
平成のメロン西瓜は昭和かな

憲法記念日

森岡正作

線がひかり光が線に鮎遡上
憲法記念日律儀なバスの日章旗
鯉のぼり泳げる峡のからんどう
競りに出す牛後退る青葉騒
竹皮を脱ぐ大岡越前の墓所
日焼子の自づと海の匂ひせり

初 蟬 広渡敬雄

銀河系おぼる砒素食ふバクテリア
糸で切る陶土ひんやり竹の秋
初蟬や砥石に水を走らせて
立てて干す畳八枚夏うぐひす
ざりがにのバケツの音も初恋も
麦埃牛のまなこの澄みぬたり

花冷え 大川ゆかり

汽笛だけ聞こえる丘や花林檎
伸びをして又眠る猫花の雨

花冷えの万年筆の重さかな
結婚記念日蛤つゆの薄霞み
水に浮く一円玉と春愁ひ
薫風や鱗結びの弓袋

一 撃 松井志津子

上げ潮の一撃巖の鵜を翔たす
長屋門残りてなんぢやもんぢや咲く
春愁を秘むるまなざし阿修羅像
喪の庭に赤を尽してゐる椿
昼寝より覚めて死のこと死後のこと
落青く煮上げて八十路生きめやも

子育て 宮内とし子

風に組み風に解かるる花筏
子育ての加減をいまに鯉のぼり
少年の魚籠に一匹あたたかし
心にも開け放つもの五月来る
先師墓碑に礼なす心花は葉に
麦の秋パイプオルガン重々し

魚 梯 渡 部 節 郎

ナースきびきび更なる白に更衣
クローバーに轍やさしく車椅子
潮仏洗ふ荒々しき卯波
海苔筥に一期一会の潮かな
方向は各々熟慮蝮の道
若鮎の躍る魚梯の瀬音かな

青 葉 潮 楠 原 幹 子

たんぽぽの黄や踏まれても踏まれても
定食の今朝水揚げの鱈かな
春光やオリブオイルパンにつけ
五月来るハムの切り口もも色に
こころざし高し竹皮脱ぎ捨つる
青葉悼・遺藤真砂明様潮海の男を攫ひけり

赤 道 切 り 望 月 晴 美

剪定の手が青空に触れてゐる
柳絮とぶ近頃襠褌干すを見ず

捨てきれぬものに躓きさくら冷
かの夏や小箱に眠るパスポート
でで虫も覗くポストの小暗がり
ざつくりと赤道切りやメロン食ぶ

一 語 武 藤 嘉 子

行く春や根岸の里の松愛でて
音もなく降りつぐ春雨明かりかな
花嵐に褰られたる身の緊まり
ちちの拳かははの一語か春の雷
一夜かけて百の光の水張田
暮れさうで暮れぬ水面や竹の秋

三 行 詩 藤 森 す み れ

登山靴履くや身の内軽くなる
青春の彼の日従へ青嶺行
三行詩ほどの畝立て薯植うる
北あかりてふ佳き言葉薯の種
空地みな帰化たんぽぽの黄の世界
一花だに散らざる今を師の句碑に

茫洋と 田所節子

この先の茫洋とある潮干潟
館を煮る春愁の息ふつつと
木々の芽の嘴ひらくかにほぐれ初む
花吹雪地球も深く呼吸して
逃水の海に逃れでしまひけり
鳥雲にたしか名刺を貰ひをり

樹木医 鈴木良戈

朝光やおばたまの花香る頃
樹木医の執念花の満開に
石仏の閉ぢし眼や春惜しむ
植木市光も人も溢れけり
幼な子の勢ひて泣ける芽立ちかな
夜桜や音なく堀の水位増す

登四郎忌 大畑善昭

毎日見て敦盛草の幌の数
家族七人ゐて大小の首夏の靴

起きてすぐ白衣白足袋登四郎忌
明易の枕に残るくぼみかな
日出づる国の美田と夏つばめ
大きな家あり老人と蛇一匹
炬燵解く 河口仁志

さまざまな話題秘めたる炬燵解く
死後もまた逢ひたき人の花衣
かいま見し嫁の気性や毛虫焼く
声出さば崩れさうなる白牡丹
牡丹見る一人ひとりの持ち時間
忽と逝く海遠藤真砂明氏を悼むの男の五月かな

よみがへる 瀨上千津

活火山列島に住み青がすみ
朴咲けり詩の言霊よみがへる
卯波悼・遠藤真砂明様たつ飛沫の高さ男逝く
遺されて何為すべきか子どもの日
ひとの死に馴れて一過の青嵐
玫瑰や鳥海山より朝日さす

潮鳴集



直感 栗原公子

春落葉記憶あつめるやうに掃く
春闌る木琴にある叩き窪
桜蔭降るや直感たよりとし
ドロップのごと兎ら駆ける五月の野
封筒の内側青し夏隣

自鳴鐘 大沢美智子

島ほどのタンカーを引く青葉潮
水中に楽湧いてゐる蝌蚪の渦
べつ甲屋（倉庫）絵馬屋御香屋走り梅雨
夏来る大樹たたへて谷中路地
青葉寒もう刻追はぬ自鳴鐘

真帆 井原美鳥

日の丸てふ弁当に種昭和の日
白服やむかし映画にジャン・ギャバン
そののちのノラを思ふ日の髪洗ふ
真帆（海の男）上げし男のために南風吹く
ふつと湧く校歌一章雲の峰

無償の重み 菊地光子

巻き方をふはりと変へて春シヨール
屋上に稲荷ののぼり街薄暑
白といふ無償の重み夕牡丹
炎天や片手でつぶす紙コップ
降りさうな空持ちこたへ朴の花

沖作品



能村研三選

飛魚の目に残されし日本海

そよ風とあ・うんの呼吸柳の芽

鳥どちの見えて隠れて花の雲

真青なる空はキャンバス花の中

桜葉降るや大地の深呼吸吸

逃水の逃げきり図る料金所

子規看取る律の一語のあたたかし

子規庵にしばし端座し春惜しむ

差し潮に足を取られし汐干かな

卵の花や庭から入る母の家

花種蒔くなめらかに指こぼれつつ

天上の夫在すやう朴一花

言ふなれば製糸の都花は葉に

産声のはじけるばかり花明り

花水木嬰は十指をかざしをり

市川

本池美佐子

千葉

塩野谷慎吾

長野

宮坂 秋湖

千葉

竹内タカミ

岡 真紗子

神奈川

小林 和世

筥に手元狂ひし鍬の跡
踏みしだきたき衝動に茅花原
聖五月風一山を輝かせ
含差草全部眠らせ納得す
林いま何の蜂起や青嵐
御手洗の杓のとまどふ花筏
花万朶鳥は花好き遊び好き
会津には会津の仏風薫る
快慶の仁王の威嚇もどり寒
詩の一片探す子規庵風光る
雑念を遥かにしたる菊根分
黎明の山を鎮めて雉子鳴けり
謙信の絵風の睨む日本海
葉桜や御百度石の朱の文字
囀に島の膨らむ一日かな

沖作品 15句選評

*
能村研三

桜 葵 降る や 大地 の 深 呼 吸 本池美佐子

桜の花がすっかり散つてしまい、枝には葵をのぞかせた萼が残る。やがてそれもぼろぼろと落ちる。華やかな桜花爛漫の頃とは打って変わった寂しさを感じる。桜の木にとつても花を咲かせたという大仕事を終えた安堵感に包まれる。満開の花の頃の華やかさと、葉桜の頃の生命観が溢れる頃に挟まれた、桜にとつては地味で翳りのある時期でもある。桜の花びらを降らせた時は、花びらの存在感があるため大地もまだ深呼吸する余裕すらなかったが、桜葵が降る頃は、すべてを締め切った達成感から、大地が大きく深呼吸出来る時でもあるのだ。

卯の花や庭から入る母の家 塩野谷慎吾

立夏を迎えると、卯の花が目につくようになる。「卯の花のほふ垣根にほととぎす早も来鳴きて…」と唱歌にあるように、庭木か生垣でその咲きようが見られる。決して豪華な花ではないので、つましやかな家のたたずまいが浮かんでくる。母の家であるからには、作者にとつても長年暮らした実家で懐かしさもある。勿論家には玄関もあるのだろうが、久しぶりに母を訪ねた作者は、勝手知ったる庭から入って母を訪ねた。

花種蒔くなめらかに指こぼれつつ 宮坂 秋湖

秋に咲く花の種を蒔くのは、春のお彼岸前後である。作者も毎年、春の楽しみの一つとして、種を蒔くのであろう。花種はたとえ小さくても、命をつないでいくしつかりとした役目を持っている。日野草城の句に「へもの種にぎればいのちひしめける」という句がある。この句も花種を指からこぼす瞬間を詠んだものだが、作者のやさしい心持がその動作に転化されている。

踏みしだきたき衝動に茅花原 竹内タカミ

「踏みしだき」という言葉は、古典的な表現で、「源氏物語」の「橘姫」に「そこはかとなき水の流れどもをふみしだく駒の足音も」と使われている。茅花は野原や川原などに広く群生し春先に槍のように細い鞘に花穂を包む。この若い花穂を茅花と言って、初夏この鞘をほどき銀色の美しい穂をなびかせる。この美しさへの執着故の衝動なのかも知れない。

〈以下略〉